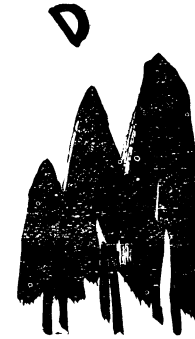

お山の夕景

寒川生

冷い風がお山の隅から隅へと吹きまくつて居る、青々とした杉がお山への登り道の兩側に茂つてゐた、私は今しも此の淋しい夕暮の山道を一人とぼ〳〵と登つて行くのであつた、日は早や西山に沒しやうとしてゐる空は赤より紫に紫は灰色に變つて行くいやに冷たい風が私の頰を撫でる、總てしんみりとしてゐる、祖師堂の前にぬかづいて私は總てを懺悔した、過去におかした罪の數々を……

お山のお引けを告げる五時半の大鐘が灰色した空へそして町へと響くのであつた。

清い身延山にお參りして寂しい何とも云へぬ感に打たれるのであつた、私はお山の靜かな夕景に恍惚とし乍らお山の清い空氣を腹の底まで呼吸するのであつた。

夕べのとばりは身延のお山にも下りて來た、すが〳〵しい氣持になりながら何時の間にか私は中谷を降りてゐた、其處には高い〳〵菩提梯が何の虛飾もなく唯無意識に長く高く連つて居た、梯の兩側には大きな杉が繁茂してゐて暗い磴道をなほ暗くして居た、で兩側には殘りはつきりせぬ電燈が上まで點々とつけられて登る人も無かつた。

風が刻一刻と烈しくなつて何だか物凄い身延の清流は沈默の中に流れて行く。

お山を降りた私は再びお山を拜んだ數百年の昔聖者日蓮の隱栖したまひし身延のお山!!それも早や暗黑の世界へ吸ひ込まれて行く何處からともなく太鼓の音が餘韻を傳へて響いてくる、身延山でなければ觀られない夕景だ、私は此の强い自然の山水を永く忘れたくない。